

校本芭蕉全集

第一卷

發句篇

(上)

書庫

小宮豐隆監修
阿部喜三男校注

校本芭蕉全集

第一卷

發句篇
(上)

角川書店

校本 芭蕉全集
第一卷



昭和三十七年五月二十日 初版發行

定價 六二〇圓

校注者 阿部喜三男

發行者 角川源義

印刷者 平井義一

製本者 鈴木俊一

發行所 株式會社 角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座東京 一九五二〇八番
電話九段(331)〇一一(代表)

Printed in Japan

曉印刷・鈴木製本

落丁・亂丁本はお取替へ致します

目次

概説

阿部喜三男 五

発句篇(上)

阿部喜三男 三

凡例

三

寛文二年

元

寛文三年

元

寛文四年

三

寛文六年

三

寛文七年

四

寛文八年

六

寛文九年

元

寛文十年

元

寬文十一年

寬文十二年

寬文年間

延宝三年

延宝四年

延宝五年

延宝六年

延宝七年

延宝八年

延宝九年
天和元年

延宝年間

天和二年

天和三年

天和四年
貞享元年

天和年間

四

四

四

四

四

五

五

五

六

六

七

七

七

七

八

延宝天和年間

五

寛文延宝天和年間

六

貞享二年

七

貞享三年

八

貞享四年

九

貞享五年 元禄元年

一〇

貞享年間

一一

天和貞享年間

一二

延宝天和貞享年間

一三

元禄二年

一四

補注

一五

概説

いま普通に俳句とよばれるものが、芭蕉のころの発句にあたる。

その名称の差は、無論、多少質的な相違も含んでいる。芭蕉のころには、連歌形式を継承した俳諧の連歌（連句）が現今よりも頻繁に行われていて、その連句の初発の句という意味で発句とよばれていた。それで、全く独立の詩形として詠まれる今日の俳句とは質的にも多少異なるところがあつた。

しかし、芭蕉のころには、すでに発句は独立の句としても詠まれていた。たとえば、本書に収録する六〇八句中、現存の資料で、その発句に付句のあるもの（連句形式が考えられるもの）は、わずかに七六句である。したがって、発句を今日の俳句にあてて考えることは、大体首肯されることである。

今日の俳句には定型（五・七・五）・季題・切字などの制約を守らないものもある。しかし、芭蕉のころにはこれらの制約が厳存していた。それで、今日の俳句といっても、今なおそうした制約を守っている伝統俳句に、芭蕉の発句は最も該当するということになろう。

すでに平安初期から意識されて来ていた短歌の上の句と下の句とを、別々に詠んで連ねるという、連歌形式を継承していた芭蕉のころは、発句を五・七・五の形式で詠むことは当然な制約であつた。そして、連歌の発句で当季を詠み込むことは、鎌倉前期から漸次定つて来て、室町期には確定的となり、発

句の独立性が強まるにつれて、俳諧では一層厳しい制約となつて来ていた。

季題には定められた季語が用いられた。ある語に一定の季節が結ばれるということは、萬葉集の時代からあり、平安時代の和歌の歴史を通じて、そうした季語はふえて来た。しかも、それはある事物とある季節の任意な結びつけではなく、その事物の本意（本情）を見きわめて、その季語とするという傾向をたどり、連歌の時代になって、一層その傾向が推進され、季語がふえて来た。

本意というのは、たとえば「春も大風吹、大雨降共、雨も風も物静なるやうに」仕候事（本意にて御座）候。春の日も事によりて短き事も御入候へども、如何にも永々しきやうに申習候」（紹巴『至宝抄』）といったようなもので、こうしたところから永日（春）・短夜（夏）・夜長（秋）・短日（冬）などの季語が生じて来たのである。

発句の独立性がさらに強くなった俳諧になると、この季語を詠み込む季題は、その短形式の表現を助けるものとして一層重要なものとなり、発句に季題を詠み込むことは不可欠な制約、ひいては本質的な発句の条件のようにまで考えられて来た。

切字も短形式の発句において、一句としての独立性・完結性などを考慮するために、表現上に工夫された特殊な用法で、これも連歌時代から十八字の切字説とか、二十二字の切字説とかがあって、芭蕉の時代に及んだものであった。

定型（五・七・五）については、芭蕉は字余り（破調）の句もかなり作っている。そして、門人土芳

によれば、芭蕉は「字余りの句作の味ひは、その境にいらざれば、言ひがたしと也。かの、人は初瀬の山嵐おろしよと有、字余りの事などいひ出て、なくて成りがたき所を工夫して味ふべしと也」(『赤さうし』)と語ったことがあるという。それで、その必要に應じては、必ずしも定型を固守したのではなかったと思われるが、全体を通じてみると、破調の句は少なく、殊に後期には少ない。また、たとえば、

芭蕉野分のわきして鹽たらひに雨を聞き夜哉かな (一三六)

狂句こがらしの身は竹齋ちくさいに似たる哉 (二〇四)

などの破調の句を、あとで定型に改めたということもあるから、芭蕉は基本的にはよく定型を守ったと見なければならぬ。

季題に対しても、右と同様な態度が認められる。

芭蕉は「発句も四季のみならず、恋・旅・名所・離別等、無季の句有りたきものの也」(『去来抄』)と言ったと伝えられ、事実、

世にふるもさらに宗祇そうぎのやどり哉 (一五四)

歩行ならば杖つき坂を落馬哉 (三三七)

のような季語の入らぬ雑の句も作り、

明ぼのやしら魚しろきこと一寸 (一九七)

猶見たし花に明行神の顔 (三七九)

草臥て宿かる比や藤の花 (三八三)

夕がほや秋はいろ／＼の瓢かな (四〇一)

などのように、季語は入れても、実際の季節にはこだわらなかった句を作ったり、『去来抄』にいうように、季語にとらわれず「年／＼や猿に着せたる猿の面」と、歳旦吟を詠んだりした芭蕉であった。

しかし、こうしたものは全体から見れば、やはり例外的な数しかない。のみならず、芭蕉は「季節の一つも探り出したらんは、後世によき賜と也」(『去来抄』)と語ったとも伝えられ、去来は「竹植うる日」は芭蕉がはじめて用いた季語だと言っている(同上)。また、

菊 鷄 頭 きり 盡 し けり 御 命 講 (四四二)

については、尚白宛書簡の中で、芭蕉は「五十年来人の見出ぬ季節、愚老が拙き口にかゝり、若上人真靈あらば、我名ヲしれとぞわらひ候」と、季語（御命講）の活用を自讃し、また、戯談ではあるが、支考宛書簡（元禄七年閏五月二十三日付）では「きせるの掃除、王五月と季を定申候」云々などとも言っている。

なお、『初懷紙評注』には「砌に高き去年の桐の実」について、「桐の実見付たる、新敷俳諧の本意かゝる所に侍る」と書いており、その他にも「本意」の語を用いている。これは有名な「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」（『赤さうし』）と言ったということ、芭蕉の去私説にもかようなところがあるが、このように季語・季題の使用については、芭蕉には積極的な態度も強く認められる。

切字に対しては、「むかしより用ひ来る文字ども用ゆべし。連俳の書に委くある事也。切字なくては、ほ句のすがたにあらず、付句の体也」（『白さうし』）と教えたという。が、またこれに引き続き、「切字を加へても付句のすがたある句あり。誠にきれたる句にあらず。又、切字なくても切るゝ句あり」（同上）とも教えたといい、また「きれ字に用る時は、四十八字皆切字也。用ひざる時は一字も切字なし」（『去来抄』）とも語ったといい、事実、

辛 崎 の 松 は 花 よ り 朧 に て (二二二)

のような切字の入らぬ発句を作ったこともあった。ここでも拘泥しない態度を見せているが、しかし、この切字に対しても、はじめに掲出したような、在来の制約に一応従うことが、芭蕉の基本的態度であったと認められる。

右のように、芭蕉は発句の在来的なものを基本的に継承し、時により場に応じては、必ずしもその形式や制約にとらわれないという態度をとり、それでかれ独自の成果を残した。それでは、そうした態度や成果はどういう点から発生して来ているのかということになるが、それを解説するのは容易でない。なぜなら、それはすでに門人去来が「宗鑑・守武以来達人世々ニ乏シカラズト雖モ、此道ニ神ニ入事只蕉翁ノミナラン」(不玉宛論書)と道破し、後世から、俳諧をはじめて真の文芸の域に生かしたとか、そうした意味で俳祖あるいは俳聖とまで讃仰される芭蕉の俳諧の全貌、しかも、それが芭蕉の人間の成長の経緯(伝記)にも関係する全般を説かなければならなくなるからである。

しかし、この稿ではそこまで述べる必要はあるまい。それは後出の各巻の概説や評伝で読んでいただけることと思う。ただ、ここでさらにふれておかねばならぬことは、芭蕉の作風の変遷についてのことである。

芭蕉を読むものが常に大きな興味を見出すことの一つは、俳諧史上の最高峰である芭蕉の境地が、かれの伝記とともに発展し進展している様子、裾野から頂上にいたる過程を読みたどることができること

であろう。それも発句のみに関することではないが、ここでは本巻に収めるところに沿うて、概観を試みよう。

寛文時代の若い頃の芭蕉の発句は、当時の一般の風潮であった貞門俳諧の作風の中にあつた。古典や謡曲などの中から文句取りをしたり、懸詞・縁語さては俗語の利用をしたり、そのような言葉の遊びの中に、おかしみを求める作風で、低調な時代の風潮の中にあつたのみならず、無論、まだ芭蕉の独自性といったようなものはほとんどあらわれていない。しかし、こうした過程を経ているということは、後年の芭蕉から考えると、俳諧史を思ふばかりではなく、特別な興味がまたそこに味われることであろう。寛文末の『貝おほひ』に至つて、芭蕉は郷党の秀才たる実を發揮し、談林風の先驅とも見られるような、新味ある奇異の妙作を示すが、その頃から生活も郷里伊賀上野を離れて、江戸に移るのである。

延宝時代になると、桃青の号も見えてくるが、同三年には東下した談林派の総帥西山宗因の俳席に列しもし、この頃の芭蕉は談林派に傾倒していく。しかし、新風談林といえども、おかしみを主とする俳諧を越えるものではなかつた。それは貞門俳諧のマンネリズムに反抗して、趣向に技法に一層の自由と新奇とを求めて、時代の好みに応じようとしたものではあつたが、なお、眞の文芸には遠く、かつ、放埒な状態をさらに展開するにも至つたものであつた。

芭蕉は延宝四年に一度帰郷をし、同六、七年の頃に俳諧宗匠となつて、その道に入り、髪も削つて僧形になつたと思われるが、この頃から殊に俳諧に主力が傾けられて来たことが認められる。同八年になると、四月に『桃青門弟独吟二十歌仙』が出、九月には其角の『田舎之句合』と杉風の『常盤屋之句合』

とに芭蕉が判詞を書いた『俳諧合』が出版され、その年の冬に深川の芭蕉庵に入って、そこに住みつくことになったのである。

この頃から芭蕉の独自性がいよいよその鋭鋒をあらわし始める。それはその生活の沈潜から来たかと思われる、おかしみを越えた何かを含む境地である。そして以後天和時代に及ぶ、漢詩文調のはげしいいわゆる虚栗調みなしじょうの時期が来る。その傾向も芭蕉のみが試みたものではなく、談林風の行きづまりを打開しようとした他の人々も求めたものであったが、この頃の芭蕉には参禅や芭蕉庵類焼という特殊事情があり、また、その孤独、貧寒な生活環境から、他の人々より一層深刻にその独自なものを追って、鋭くその境地が求められたものと思われる。

そして、貞享時代のはじめの『野ざらし紀行』の旅となり、蕉風の樹立といわれる『冬の日』を得ることになる。ここに芭蕉は真に芭蕉らしい旅を開始し、芭蕉らしい俳境を確保しはじめたといえるのであろう。

この旅を経たのちの芭蕉庵の生活もますます芭蕉らしいものになるが、さらに、かれは貞享後期の『鹿島詣』の旅、『笈の小文』の旅、『更科紀行』の旅をつづけ、その境涯の句作を発展し、展開して見せてくれる。この頃の芭蕉は、おそらく、造化随順の心境を得て来て、旅に塵外脱俗の境地を求め、風雅の交友を楽しみながら、俳諧創作の一道をたどり進んでいるようであった。

そして、それはさらに、かれの生涯の最大の旅であった『奥の細道』の旅へとつづく。この旅では東北・北陸の歌枕や古蹟などを特にたどり、多くの人々と俳諧の友誼を交し、幾多の句を吟じたが、常に

己を責めて、自分の俳境をさらに深化し発展し、独自の境地を把握することに努めたに違いない。

去来は「故翁奥羽の行脚あんぎゃより都へ越えたまひける、当門の俳諧すでに一変す」(贈晋氏其角書)といい、「この年の冬、はじめて不易流行を説き給へり」(『去来抄』)といい、ここにも芭蕉の作風に大きな進境があったことを述べている。ほぼ、芭蕉はこうした作風の経過、変遷を経て、元禄三年以後の円熟する境地へ進むのである。

芭蕉の境地を読みとるためには、無論、発句のみでは十分でない。しかし、それを最初期から最後までたどらせる中心的な資料は、やはり発句にある。作者の理解はまずその作品の正確な読解から始めるべきであるが、芭蕉を読むなら、まず、この発句に目をつけなければならない。

本書はこうした芭蕉の発句について、最初期から元禄二年末までの、製作順を考慮した年次別全集を提供するものである。

全集であるからには、芭蕉作と認められるものはすべて、漏らさずに収録しなければならない。しかし、もうここに容易ならぬ困難がある。というのは、芭蕉の発句には誤伝されたり、まだそれとは確認できない存疑のものがあつたりし、しかも、その数がなかなか多い上に、その間の判別にむずかしいものがあるからである。たとえば、

奈良七重七堂伽藍がらん八重ざくら (一六七)

のような有名な句にしても、芭蕉の句ではないという説がある。それに、新資料が出ると、従来の判定を変更せざるを得ない事情を生じることがある。たとえば、

名月の見所問^{とほ}ん旅寐せむ (五六〇)

あすの月雨占なはんひなが嶽 (五六三)

中山や越路も月はまた命 (五六六)

國^くや八景更に氣比の月 (五六七)

ふるき名の角^{つぬ}鹿^がや恋し秋の月 (五七二)

衣着て小貝拾はんいろの月 (五七六)

などの諸句を録するに至ったのは、現に本書の編集集中に新資料が出たからであつた。なお、研究者各個